昭和60年(1985年)8月10日 教皇様の声 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

8 AUGUST, 1985 毎月10日発行 第64号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1985 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

青年へのキリストの眼差し

国際青年年にあたり司祭の方々へ

青年たちと接する司祭は、どのように青年たちに耳を傾け、どのように青年たちに答えるべきかを知っていなければなりません。ただし、内的な成熟の実りとしての耳の傾け方であり答え方でなければならないでしょう。すなわち、生活と教えが首尾一貫していなければならない、さらには、祈りと、キリストとの一致、聖霊の働きかけに素直に応ずる態度が結ぶ実りから出る接し方でなければならないのです。この点について適切な訓練が必要なことは言うまでもありません。が、それ以上に大切なことは、真理と質問者(青年)に対する責任であります。共観福音書に記されてある会話を読むと、先生は青年にとって信を置くにたる権威ある御方、つまり精神面で権威を有する御方であったことがわかります。青年はキリストに真理を期待し、キリストの答えを義務を課する真理として受け容れます。真理にはキツイところがあるものです。私たち司祭は青年に強く要求することを恐れてはなりません。青年のうちには「悲しそうに」去って行く人もいるでしょう、とくに要求に応じられないと考える青年たちのうちには。しかしこの種の悲しみは、救いをもたらすものともなります。青年は救いをもたらす悲しみを体験して進歩しなければならないことがあります。徐々に真理に近づき、真理が与えるあのよろこびを得るために。

青年は、ほんとうの善は安易に入手できるものではなく苦労の末に手に入れるものであることを知っています。価値の関わる問題になると青年はある種の健全な本能と言うべきものを備えています。魂が腐敗していないかぎり、青年たちはまっすぐに健全な判断を下すものです。万一、彼らの心が腐敗しているのならば、まず土地を耕やさねばなりませんが、そうするにはほんものの答えとほんものの価値を与える以外に道はありません。

キリストの振舞のなかで特に役に立つ点があります。青年が「良い先生」と話しかけたとき、ある意味でご自分を脇におかれたキリストの態度のことです。「神のほかに良いものはない」と。(マテオ19・17、マルコ10・18、ルカ18・19参照) 青年と接する私たちにとってこの点はとくに重要です。司祭は以前にもましてこの仕事に専念すべきですし、質問者、友、導き手としてごく自然な態度で臨むべきです。しかし同時に、神を差しおいて自らを前面に押しだすようなことのなきよう注意しなければなりません。「ただ一人良い方」、目には見えぬが現存そのものである御方、聖アウグスティヌスが「私にとって最も近い方」と呼ぶ御方を、おおい隠すようなことがあってはならないのです。ごく自然に一人称でふるまうわけですが、救いのための話し合いにあって、一人称の位置を占めるのは常に、救いそして聖化する御方一人。青年との接触、私たち司祭の司牧、外的には宗教と関係のない活動までも全ては、謙遜に、神を受け容れる余地、キリストを受け容れる余地を作りだすのに役立たなければなりません。「私の父は今も働かれるのだから私も働く」(ヨハネ5・17)とおおせになったのですから。

福音書中のキリストと青年との会話のなかで私たち司祭が特に咀嚼(そしゃく)すべき表現があります。福音史家が「イエズスは彼(青年)をじっと見つめ、慈しまれた」(マルコ10・21)と記すところです。これはまことに重要なポイントです。若い人たちのために最善を尽くし、永続きする実りを得てきた代々の司祭方にたずねてみれば、その働きが効果的であった第一にして最も深い理由が、キリストの「慈しみ深い眼差し」であったことがわかるでしょう。

私たちはこのキリストの愛を、司祭である私たちのものとしなければなりません。実はこの愛は隣人愛、キリストにおいて人々を愛することであって、一人の例外もなく一人ひとりに対する愛です。青年への愛が、他の人人、つまり成人、老齢者、病者を除外するものであってはなりません。これらの人々に関心を示さないということがあってはならないのです。青年への愛は、一人ひとりを対象に全ての人々への愛からでているときのみ、まことに福音の教えにふさわしいと言えます。と同時に、愛としてカリスマ的な性格をもっているはずです。人間の一生において若いということが何を意味するかに、特別の関心を寄せるところから生まれる愛なのです。青年はその年齢にふさわしい魅力をもっていますが、同時にかなりの数の弱さや欠点をも持ち合わせています。福音書にでてくる青年は、神の掟に忠実なイスラエル人ですが、財産に執着していました。(…)良き牧者に必要な愛、誠実な愛があれば、青春そして青年に固有な長所や短所に充分気づくことができます。と同時に、この愛は、それらの長所や短所を通して直接人々に伝わるものです。人生のすこぶる重要な時期にいる個人個人へ直接に伝わるはずなのです。事実、多くのことがこの時期に確定、決定されますが、なかには取り消しのきかない決定もあります。人の将来は大部分その人の青春のあり方によって決まってくるというわけです。(…)

このような愛は無私でなければなりません。青年にはこの愛が必要です。私たち司祭一人ひとりは無私の愛を示す覚悟がなくてはなりません。司祭生活の修徳への努力、聖性をます努力、また祈りの精神、キリストとの一致、キリストの御母に自らをささげる努力、それらすべてが日毎にこの点について試されることになります。それゆえ、司祭の知的な面での教育は非常に大切と言えましょう。しかし、それ以上に大切なのが、経験でわかるように、善良、挺身、確たる態度、つまり人格と心の質なのです。

司祭職における兄弟のみなさん、私たち一人ひとりが主イエズスに熱心に祈りをささげることによって、青年との私たちの接触が、青年に対するキリストの眼差し、そしてキリストの青年への慈しみを、わかち合うものでありますように。また、司祭としてのこの無私の愛が、男女、少年少女、つまり青年たちの期待に応えうるものであるよう一所懸命主に祈らなければなりません。(…)

信仰と道徳　シリーズ Ⅲ

1　前回のカテケージスで、信仰は啓示によって条件づけられること、そして、信仰の前に啓示があることを勉強しました。今回は、啓示とは何かを明らかにしたいと思います。(神の啓示に関する教義憲章を参考にします。)その前に、まず信仰についてもう少し考えてみましょう。ご自身を示すことを望まれた知恵深く良き神に応えて、「信じます」というのはどういうことなのでしょう。

「信じます」という前から、人は理性の働きを使ってすでに神についての何らかの考えを持っています。神の啓示についての憲章は、次の言葉で説明しています。「万物の起因であり、目的である神は、人間の理性の自然的光によって、被造物を通して確かに認識されうる(ローマ人への手紙1・20参照)。」(『神の啓示に関する教義憲章』6)

第二バチカン公会議は、先の第一バチカン公会議で充分明らかに提示されたことを、再び思い起こさせましたが、これは新旧両約聖書に基づく教会の聖伝に一致した教えです。

被造物を通して知られうる神

2　神の存在は、被造物を通して知りうるということについて述べる古典的テキストは、聖パウロのローマ人への手紙にでてきます。

「神について知りうることは、彼らにとっても明らかである。神がそれを彼らに表わされたからである。神の不可見性、すなわちその永遠の力と神性とは、世の創造のとき以来、そのみわざについて考える人にとって見えるものだからである。したがって、彼らは言いのがれができない。」(ローマ1・19～21)　このとき、聖パウロの頭の中にあったのは、「不正によって真理をさまたげる人々」(ローマ1・18)のことでした。この人々は、その罪によって、誰もが知りうるはずの神に光栄を帰さなかったのです。人は、神の存在だけでなく、神の本質、完全性、属性までも、ある程度知ることができます。見えざる神は、お造りになった物を通して何らかのかたちで知られうるようになさったのです。

旧約聖書の知恵の書でも、聖パウロが語ったように、被造物を通して神の存在を知りうることがはっきりと述べられています。少し長いですが、その全文を掲げてみましょう。

「何はさておき、神を知らない人は誰でも、しん底からのおろか者だ。彼らは、目に見える良いものを通して、(存在するもの)を知ろうとせず、そのわざに目をとめても、それをつくった方を認めない。

「彼らが、この世を支える神々として認めたのは、火とか、風とか、すみやかな空気とか、天界とか、波濤とか、天からの光とかだった。だが、それらのものの美に心を奪われて、それを神々だと思った彼らなら、それらの主が、はるかにそれらにまさるものだと知らねばならない。それらを造ったのは、美の創造主ご自身だからである。

「また、それらの力と働きとに感嘆した彼らなら、それらを造った方が、いかに勢力あるかを、推しはからねばならない。

「被造物の偉大さと美とは、その造り主を、類比によって推しはからせるものだ。

「だが、彼らには、大して責任がないかもしれない。彼らが迷ったのは、おそらく、神を求め、神を見出そうとしたからなのだ。

「みわざをしらべて、彼らは神を見出そうと努力した。しかし、彼らは、目に見えるもののとりことなった。それが実に美しかったので。だが、彼らも許すわけにはいかない。彼らに、宇宙を探れるほどの知識があったのなら、なぜもっと早く、それらのものの主を見出さなかったのか。」(知恵の書13・1～9)

第一原理がないと何も説明がつかない

3　この章句に見られる主な考えは、聖パウロのローマ人への手紙(1・18～21)の中にも見られます。神は被造物を通して知られる。目に見える世界は、見えない神の存在を確認するための出発点なのです。知恵の書の章句はよりいっそう重みを増してきます。霊感を受けた筆者は、あの時代の被造物に光栄を帰する異教徒たちと、論議をかわしています。また、旧約の聖書記は、私たちの時代はもちろん、どの時代にも通用する省察と判断の原理となるものを示してくれています。彼は、目に見える世界を知るために払われる多大な努力について語っています。また、「神を求め、見出したいと望む」人々のことにもふれています。そして、人間は、この世界のことを熟考するだけの知恵を持っているのに、なぜ、この世界の主を知ることができないのかと問いかけるのです。知恵の書の筆者も、その後にくる聖パウロも、この点をとがめています。しかし、この点については、しばらくおいておくことにしましょう。

今は、とりあえず先ほどの問題、天地万物(大宇宙と小宇宙)について、またその法則や現象、構造やエネルギーについての知識をいくら増しても、その方なしにはこの世を説明することができない、第一原理である神をなぜ知りえないのか考えてみましょう。現在、かなりの人のつまずきのもとになっている問題を、検討してみなければなりません。しかし、嬉しいことに今日でも、科学的知識によって、信仰に励まされ、あるいは、少なくとも神秘の前に脱帽する誠実な学者が数多くいることも心に留めておきましょう。

人間の知性

聖伝は、先ほど述べたように、新旧両約聖書に基づくものです。この聖伝にのっとって、十九世紀の第一バチカン公会議で教会は、被

説教・講話・書簡等の抄訳

国際青年年にあたって(Ⅲ)

――神は愛――

造物を通して神を知りうる力が、人の知性に与えられているという教義を思い出させ、確認してくれています。また、今世紀の第二バチカン公会議でも、神の啓示に関する教義憲章中、この教義を繰り返しとなえています。これは、実に重要なことです。

神の啓示は、確かに、人が「信じる」ときの信仰の基礎となります。しかし、同時に、その神の啓示によって書かれた聖書の句を読めば、人が理性の力だけでも神を知りうることがわかります。たとえ間接的で時間がかかるとしても、とにかく人は、神について何か悟ることができるのです。ですから「信じる」ことと同時に「何か知っている」と言うことができるのです。この神に関する知性の認識は、自然神学という学問の中で体系的に扱われています。自然神学は哲学の一つであり、存在する物についての哲学、形而上学から生じました。この学問の狙いは、第一原因であり宇宙の最終目的である神を知ることです。

4　これらの問題は、それに関する様々な哲学的論議と同様、信仰の真理の教義を少しかいま見ただけでわかるわけではありませんし、また、人の心を神の探索に向かわせる道、いわゆるトマス・アクィナスの五つの道を、ここで詳しく検討するわけにもいきません。今回のカテケージスでは、キリスト教ではもともと、理性の力だけでも神を知りうるのだとしていることを、心に留めておくだけで充分でしょう。ですから、信仰に基づく神についての考察は全て、理性的で知的なものだと、教会は語るのです。たとえば、無神論でさえ、神について語っているのと同じことです。無神論は、神を否定することですが、そのためには、否定するものの存在をまず知っていなければならないからです。

信仰によって得た知識は、理性だけで得た知識とはたしかに異なります。しかし、人間の側に、神に関する何らかの真理を知る能力がはじめからなかったとしたら、神が、ご自身をいくら人間に示そうとしても、できなかったことでしょう。ですから、人の知性の特性である「知る」という行為と並んで、それに加えてキリスト信者の持つ「信じる」という行為がくるのです。さらに、この信仰によって、信じる者は、たとえわかりにくいとしても、ご自身を表わされる神の奥深い生命の神秘を知る鍵を握っているのです。

福音書によると、キリストはあの青年に「神ご一人の他よいものはない」とお答えになりました。私たちはすでに青年の質問を聞き知っています。「よい先生、永遠の生命をうけるために、私はどうすればよいのでしょうか。」　私が有意義で価値のある一生を送るためにはどうしたらよいのでしょう。この質問を現代の言葉におきかえるとすれば、それに対してキリストはきっとこうお答えになるでしょう。「神のみが全ての価値の出発点であり、神のみが人間の存在に確かな意味を与えてくださる」と。

神のみがよいと言うとき、それは全ての価値の始まりは神にあり、神においてのみ全てが完成されるということです。キリストは「アルファとオメガであり、始めと終わりである。」(黙示録21・6)　神においてのみ、本物の価値を見出し、またそれを確認することができる。神から離れているならば、神に言及しないならば、被造物の世界全体は、まったく意味のないものとなってしまいます。被造世界全体がその透明さと表現能力を失ってしまうのです。悪が善とみなされ、本当の善は拒まれる。評価したり、判断したり、行動をおこしたりするところから神が除外されるとこのようなことが起こります。これは、私たちの経験で明らかなのではないでしょうか。

では、なぜ神のみがよいお方なのでしょう。それは、神が愛だからです。福音書の言葉を通してキリストはこのことを教えてくださいます。なかんずく、キリストの生と死の証人が次のように言っています。「神は、御独り子をお与えになるほどこの世を愛された。」(ヨハネ3・16)神はよき御方である。神は「愛」(ヨハネ①4、8、16)であらせられるから。

すでに見てきたように、人生の価値や意味についての問いかけは、青春という独特の宝の表われです。この問いかけは、これから迎える人生計画に関わる期待や心配から生まれます。また各自の苦しみによって青春が試される時、他人の苦しみに深く心を打たれる時、この世に存在する様様な悪を見て強いショックを受けるとき、最後に、罪の神秘(テサロニケ②2・7参照)に直面したとき、心の一層深いところから、この問いかけは生まれます。キリストは答えて言われる、「神ご一人の他よいものはない。」神のみが愛なのです。難しい答えだと思われるかもしれませんが、これは確かで手ごたえのある真理です。この答えの中にこそ、確かな解決があるのです。私は若い友人であるみなさん方が、できるだけパーソナルな仕方でこのキリストの答えを聞くようにと祈ってやみません。この答えをしっかりとつかみ、受け容れ、完成される内的な道を見つけてくださるように切に祈ります。

キリストはあの青年とこういう風にお話になりました。みなさん方一人ひとりと話されるキリストもこういうお方です。「よい先生」と言えば、「なぜ、私を『よい』と言うのか。神ご一人のほかよいものはない」と答えられます。私がよいというのが本当なら、それで神を証明していることになる。「私を見た人は、父を見た」のである。(ヨハネ14・9)師であり、友人であるキリスト、十字架につけられ、復活されたキリスト、昨日も今日も、世々に同じキリスト(ヘブライ13・8参照)は、このように話されます。

以上が、自分の内にある宝、つまり青春という宝のゆえに投げかける疑問、そしてその疑問に対する答えの核心です。青春はみなさん方の前に様々の展望を開き、生涯の計画を一つの使命として示してくれます。だからこそ、人生の価値や意味を問わねばならない。真理や善、悪について問わなければならないのです。キリストはそれに答え、そういった疑問の全てを神に任せよとおおせになります。が同時に、その源と根拠となるものは、実はみなさん方自身の中にあることを教えてくださいます。みなさん一人ひとりが、神のかたどり、神の似姿として造られたからです。(創世の書1・26参照)　神のかたどりであり似姿であるからこそ、みなさんはこのような、当然出すべき問いかけができます。神と離れているなら自分自身を知り得ない、また、神なくしては自己を完成させることはできないということが、こういった疑問がわくという事実によってわかるでしょう。キリストがこの世に来られたのも、まさにこのことを私たち一人ひとりに悟らせるためでした。キリストがいなければこの人間に関する根本的な真理でさえ、簡単にわからなくなってしまいます。「光はこの世に来た」(ヨハネ3・19)、しかし「闇は彼を悟らなかった。」(ヨハネ1・5)

不変の教え

ご聖体とキリスト教的家族

より真実なる世界のために

一九八五年八月ケニヤのナイロビで開催される国際聖体大会につきまして、この機会にご聖体への信仰が高々と顕示されること、また愛するアフリカの各国をはじめ、世界中から集まる信者のみなさんが得られるであろう霊的な恵みについて考えますと、この大会が教会にとっていかに重要な意味を持つかがわかります。

大会のテーマとなる「ご聖体とキリスト教的家族」は、ケニヤおよびアフリカ大陸のみならず、世界各地のキリスト信者にとってもたいへん意義深いものです。ですから、一人ひとりが祈りと内省をもって大会に備え、私たちの切なる願いに応えて、この機会に聖霊が豊かに注いでくださる恩寵のたまものを受け入れる心構えを新たにするのは、まことに時宜に適ったことといえましょう。私のこのメッセージが黙想の糧となり、大会への備えに役立つことを望みます。

聖体――過ぎ越しの食事

1　ご聖体の秘義を考えるとき胸をうたれるのは、教会が生まれて間もない頃から、「家」、「家族」、「晩餐」などの言葉で思い起こされるような現実の共同体の中で、ご聖体の秘跡がはぐくまれていたことです。「家」といえばすぐに思い浮かぶのが、「席を整えた二階の大広間」に弟子たちが「準備」したという、あの「家」です。そこで主は、弟子たちと共に過ぎ越しの食事をすることができました。(ルカ22・7～22)　使徒行録にも、原始キリスト教共同体について記されているところがあります。彼らは「心を一つにして毎日神殿に参り、家でパンを裂き、喜びと素朴な心をもって食事をとっていた。」(使徒行録2・46)とりわけ、「週の最初の日」に使徒の言葉を聞くため集まったあと、「パンを裂いた。」(使徒行録10・7～11)　こうして、主が明らかに命じられた通りに、最後の晩餐における主の行為が繰り返されていたのです。(ルカ22・19)これら全ては家族の中で、いわば家庭的な状況のもとに行なわれます。秘跡に与る人々は、キリストへの信仰を通して、聖パウロの言う「神の家族」(エフェゾ2・19)の一員となるからです。

こうしてご聖体を祝うことは、兄弟愛の秘跡として、ごく初期の頃からよく知られていました。ご聖体には、イエズス・キリストが御体と御血、ご霊魂と神性とともに、実際に、実体的に現存し、キリストを信じて敬虔な心で受け入れる人々との一致をより深めようと待っておられます。その現存は、はるかな過去から未来にまで及びます――永遠の御父のみ心から目的地のゴールに至るまで、主のご託身から人類の歴史の流れが完了するまで。聖パウロがいみじくも言うとおり、「このパンを食べ、このさかずきを飲むごとに、主が来られるまで、主のご死去を告げるのである。」(コリント①11・26)　こうしてこの世の旅人である私たちは、信仰によって照らされ、希望に養われるこの期待の時期の間に、キリストご自身が最後の晩餐の席でお話になったルカ22・15～16)「神の国で味わう宴席」のよろこびを、ご聖体によってあらかじめいくらか味わうことを許されました。キリスト信者がこの事実に目をとめるのは良いことです。飢えを満たす神の食物に養われ、主に対するより充実した親愛関係への望みを新たにし、ついには「この世を去ってキリストと共にいる方がはるかに良い」(フィリッピ1・23)と信ずるに至るでしょう。こうして聖体大会は、父の家での最終的な集いの、至福に満ちた経験を予見し、告げ知らせます。

ご聖体――家族の秘跡

2　ご聖体の共同体的な面は、家族という共同体の中に、はっきりと見られます。初代にあっては色々な理由から個人の家でご聖体を祝いました。(…)　後に教会が発展するにつれ、教会内での聖体賛美は盛んになり、義務づけられ、全教会共同体の行なう礼拝の対象として称えられるようになりました。一方教会は、「キリストの神秘体」、「神の家族」という、より豊かなイメージでとらえられるようになりましたが、だからと言って、教会共同体を形成する細胞という、家庭のもつ聖なる意味が減じるわけではありません。第二バチカン公会議は、福音的な新鮮さをこめて、家庭のこの「聖なる」現実を明らかにしています。教会憲章は家庭を一種の「家庭の教会」(n.11)、信徒使徒職に関する教令では「教会の家庭的な聖所」(n.11)と呼んでいます。

今日、ご聖体は、キリスト教共同体という家族の中で、とくに小教区で祝われています。だからといって、主の御体と御血の秘跡と、かの「第一にして生命に満ちた社会の細胞」すなわち家庭とが深いつながりを見失うことにはなりません。実際、ご聖体が、キリストを信じる人々に生命を与えるための秘跡であるのなら(ヨハネ6・53)、家族は神に選ばれた「場」であり、「その中で人間社会の新しい市民が生まれる。かれらは聖霊の恩寵によっていく世代にもわたって神の民を永続させる神の子とされる。」(『教会憲章』n.11)　同様に、ご聖体の犠牲は「十字架上に御血で捺印された、教会とキリストとの愛の契約のしるし」であります。(『使徒勧告』ファミリアーリス・コンソルツィオn.57)また洗礼を受けた者同志の結婚は、キリスト信者の家庭の源かつ土台であり、教会とキリストとの契約の、生き生きとした雄弁な象徴に外なりません。従って、婚姻が祝われるご聖体の秘跡において「信者の夫婦は婚姻の誓約の源に出会い、内的な支えを得、常に更新する力を見出」します。(『使徒勧告』ファミリアーリス・コンソルツィオn.57)

聖体は家庭における使徒職の源

3　今まで述べた教会および信仰生活上の理由により、キリスト信者の家族には、現代世界での福音の証人になるという、特別な使命のあることがわかります。このように命じられた任務を果たすには、ご聖体から力を得なければなりません。「渡された」キリストの御体と(流された)御血に与るキリスト信者の家族は、信仰を広める使徒的活力の尽きざる源を得る。」(ファミリアーリス・コンソルツィオn.57)とあるとおり。このように強められ、今も働く「神の国が持つ力と幸福な生命への希望とを声高く宣言する。」(『教会憲章』n.35)

こうしてキリスト信者の家庭は、自らがより大きな教会共同体の中にあって、固有の使命をおびていることを知るのです。すなわち「(遠く離れている人々)、まだ信仰を持たない家族、かつて受けた信仰から離れて暮らしている家族たちに向けられたキリストの愛の存在を、光り輝く印となって告げ知らせること」を。(『使徒勧告』ファミリアーリス・コンソルツィオn.54)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393